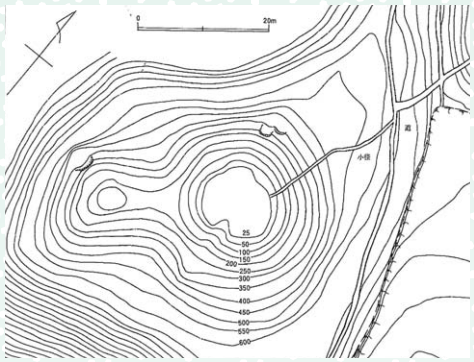
シリーズ 第21回

前方後円墳に埋葬された首長 ―赤峪古墳―

町内には四～七世紀頃に築造された古墳が約五〇〇基確認されており、そのうち9割以上が鏡野地域の丘陵地に存在します。

古墳といえば、鍵穴のような○と△を合わせたような形状の「前方後円墳」をイメージしますが、町内では八基の前方後円墳が存在します。これらの前方後円墳は、ほとんどが学術的な発掘調査は行われていませんが、土居の赤峪古墳は昭和三十五年から翌年にかけて、鏡野町綜合調査の一環として墳丘の一部と埋葬施設の発掘調査が実施されました。

赤峪古墳は、土居字赤峪の山頂にあり、墳長は約四五m、埋葬主体部のある後円部は径約二八m、高さ約四・五mあります。自然地形を削って整形し、上に盛土をして作られました。現在は土と草木に埋もれていますが、本来は表面に一〇～二〇cm大の石が全面に葺かれていました（葺石）。


赤峪古墳実測図

埋葬施設は、前方部に割石を積み上げて作られた箱式石棺がありましたが、過去に盗掘のため破壊されており、内部には何も見つかっていません。

後円部の埋葬施設には、長さ約五・四m、最大幅約八〇cmの長方形の範囲に小さな石を敷き詰めた「礫床」があり、この礫床が緩やかなU字形を呈していることから、丸太を縦に割って、中をくり抜いて空洞にした「割竹形木棺」という、古墳時代前期に多用された棺を納めていたと推定されます。木棺は腐朽して残っていませんでしたが、木棺に納められていたと思われる被葬者の人骨と、副葬品として銅鏡・勾玉・ガラス小玉・蛭鎌・板状鉄器・小形手斧が、棺周辺からは土器が見つかりました。

後円部埋葬施設・礫床

築造年代は、出土した土器の形状から古墳時代前期に当たる四世紀前半頃と推定されます。

副葬品の量は多いとはいえませんが、銅鏡は中国製の盤龍鏡とよばれるもので、鋳上がりの良い優品です。裏面には龍と虎が半肉彫りに描かれ、その周りに

青蓋作竟四夷服多賀国家人民息胡虜殄滅天下復風雨時節五穀孰長保二親得天力

の銘文があります。「青蓋」というのは、鏡の製作工房の名前で、王が周囲の異民族を服従させ、住みよい国を作り、人民が末永く実りの多い土地で安息に暮らしていくという王の威徳を顕彰する意味の言葉が書かれています。

この鏡は中国の後漢の時代、一世紀後半頃に作られたもので、その後日本にもたらされ、約二五〇年もの間伝世して、赤峪古墳に副葬されたと思われます。

赤峪古墳は町内の前方後円墳では、三角縁神獣鏡を含む三面の銅鏡が見つかった郷観音山古墳（下原・四世紀初頭築造）に次いで作られた古墳です。

古墳時代が始まってわずかの間に銅鏡を副葬する前方後円墳が築造されたということは、当時、早くから大和朝廷と密接な関係を持ち、鏡野町域南部の広大な盆地や吉井川・香々美川などの水利を掌握していた有力な首長が存在したことを示しています。

赤峪古墳の出土遺物は鏡野郷土博物館（ペスタロッチ館2階）に展示しています。

赤峪古墳出土盤龍鏡

参考資料：『鏡野町史』
『赤峪古墳発掘調査報告書』
『岡山県史』

お問い合せ先
生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

2012年2月号　第84号　毎月1日発行
〒708-0421 岡山県苫田郡鏡野町井坂495 鏡野町情報広報課 TEL0868-52-2212
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/